

---

# 無言のきみと毒舌の君

Retruner

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

無言のきみと毒舌の君

### 【Nコード】

N3287C

### 【作者名】

Retrunner

### 【あらすじ】

誰に対しても、どんな時も無言のままの不思議な男の子と誰に対しても、どんな時も笑顔なのにある人に対してはやたらと毒を吐く男の子と剣道部大将の異常に強い女の子の物語。

## 無言のきみと毒舌の君

彼はいつも黙ったままだった。

理由はわからない。

決して話せないというわけではないだろう。

先生への返事や「はい」か「いいえ」で答えられる質問にははっきりと答えているのを見たことがある。

「あの」

でも、それだけ。本当に yes , no だけだった。

それ以上は誰に対しても絶対に言葉を発することは無かった。

「聞いてますか？和音」

誰とも話をしない所為で大多数の人間に嫌われ、多分友達なんて一人もいない。

まあ尤も少数の女の子からは「あの寡黙なところがカッコいい」と言われてそれなりに人気はあるのだけれど…何を隠そうわたしもその一人だったりして…でへへ。

「でへへ、じゃありません（怒）」

「ふえいひゃんいらいひよ（静ちゃん痛いよ）」

にやけて緩んだほつぺたを横に思いつきり引っ張りながら笑顔で怒って…いや、キレていらっしやる。

わたしの向かい側で山積みのお弁当を1つずつ平らげていた自称他称男前の崎谷静はわたしが話を聞いていなかったのがかなり頭にきているらしい。

この男、我が校随一の男前で、わたしが部長を務める剣道部の副部長でもある。

そしてそのお陰でうちの部には女子部員が大量に集まり、その女子部員目当ての男子が入部してくるためかなりの大所帯となっている。でも不純な動機の塊と言っても過言ではない部活なので決して強くは無い。

「ごめん。静ちゃん。なんの話だっけ？」

「ハア…明日の練習試合のメンバーの話ですよ」

ため息をついたので呆れているのかと思っていたけど眉がピクピク動いてるのを見るにまだ怒ってる。

静ちゃんはほとんど常に敬語を遣いほとんど常に笑顔で学校生活を過ごしているために誰にも気づかれていないけど実はかなり短気で喧嘩っ早くて毒舌家である。

「うちの部は男女関係無く実力主義だからね」。静ちゃんとわたしは確定としてあとの三人はどうしようかねえ？」

「誰でも大差ないでしょう？どうせ僕らには回ってこないでしょうから」

「そつなんだよね…面倒な伝統だよね、全く」

この高校の部活にはそれぞれ初代のメンバーが創った伝統がある。

例えばサッカー部はキーパー以外は試合以外でボールに手で触れてはならない、茶道部は気に入らない人間以外にはいつでも無料で茶と茶菓子を振舞うこと、などがある。

そして剣道部は「練習試合及び公式戦出場時は完全な実力主義で先鋒から大将までを並べること」である。

その伝統のお陰で今まで一度も試合に出場できたことが無い。

とりあえず部内では敵無しで、大将に就いてはいても自分が井の中の蛙なんじゃないかと常に他の高校の生徒に対して劣等感をもってしまう。

幼いときからいつも一緒に剣術の練習をしてきた静ちゃん曰く「今の和音なら人間には負けないでしょう」だそうだ。

じゃあわたしとほとんど互角にやり合ってる静ちゃんは何なのさ。

「まあいいや。順当にいつて…加藤さん・佐藤さん・伊藤さんの三人でいいよね？」

「問題ないでしょう。それより和音？先ほどまた広瀬くんのことを考えていましたね？」

「バレてた？」

「彼のこと意外で和音があれほど気味の悪い顔をしているところをみたことがありますでしたから推測に過ぎませんが…」

そう言うてにやけるあたり本当に性格が悪い。広瀬くんのことになるといつもの2割り増しくらい性格の悪さに拍車がかかる。

どうやら静ちゃんも広瀬くんが嫌いらしい。

以前彼こと広瀬保くんが剣道部に所属していた時に静ちゃんが打ち合いで初めてわたし以外の人に負かされ、そのリベンジのために影でかなり努力していたのに広瀬くんが突然退部してしまったから結局再戦を果たせないまま勝ち逃げされてしまいそのことを今でも恨んでいるらしい。

その打ち合いはすさまじいものだったらしいのだけどわたしはその日欠席していて見ることはできなかった。

「広瀬くんの話はもういいから。早くお弁当食べちゃいな」

「わかってますよ」

照れて目をそらして窓越しに空を見上げながら話題をそらした。

空はどこまでも青くてまるで静ちゃんの瞳みたいだななんて思いながらいつまでも眺めていた。

……明日は試合したいな……

## 迷惑な伝統と迷惑な挑戦

彼は毎回そうだった。

わたし達が練習試合とか公式戦をする度に遠くからその試合を眺めていた。

わたしは彼が見ている内にいいところを見せようと張り切ったこともあったけど今ではもう諦めた。

完全な実力主義のうちの部は公式戦では先の三人が見事に三連敗してくれるお陰で副将と大将に試合が回ってくることはまず無くて、それなら練習試合で、と思ったけどその考えは甘かった。

うちの部は近年まれに見る弱小剣道部で練習試合を申し込んでも断られ、申し込んでも確実に断られる。

そんな中一校だけが試合に応じてくれるんだけどその高校の剣道部の監督がうちの剣道部のOBでこの人は試合形式を公式戦と同じ三勝制にするもんだから結局試合には出られずじまい…

一度うちの監督に試合形式の変更を求める抗議をしたけどうちの監督はOBの大学の後輩らしくて逆らえないのだそうだ。

じゃあ個人戦、と思って監督に話しをしたら「俺は個人プレーは嫌いだ」と言われ遭えなく却下となった。

「何この八方塞がり具合。集団イジメ？」

「突然叫びださないでください。負けた三人が虎に睨まれた蛙のようになっっていますよ」

どうやら勢いあまって叫んでいたらしい。

武道場全体がかなり引いた空気になっちゃったけど、すぐさま何事も無かったかのようにもとのざわざわ感を取り戻した。

「ごめんね。あんた達を責めてるわけじゃないから安心して。それより静ちゃん、虎ってなにさ？」

「僕は見たままを忠実に形容しただけですよ」

「だからって虎なんて…」

すぐさま反論しようとしたけど横目に負けた三人が大きくうなずいているのを見て止めて、三人に一発ずつデコピンをお見舞いしてやった。

「今日はもう終わり。着替えて早く帰りな」

「今日は少し用事があるので僕は先に帰りますよ、和音」

「ん、わかった。お疲れさん」

試合後の片付けを終えて帰ろうと思ってふと観戦席に目をやると…なんと広瀬くんが眠っていた。

たしかに面白くない試合だったけど…寝る？普通。

起こしたほうがいいよね？もうここ閉めなきゃだめだし。

そつと近づいていき、肩をゆすつて起こすと広瀬くんはゆっくりと体を起こした。

「おはようございます」

「お、おはようございます…って喋った」

「そりゃ話すよ。人間だから」

ヤバイ。

感動してちよつと泣けてきたよ。

「試合、またできなかったね」

また、ってまさかいつも見てくれてたのはわたし？なぐんて自惚れちやったりしたりなんかしてみたり…

「ねえ、俺と打ち合いしない？俺に勝ったら1つだけ何でもゆーこと聞くよ」

「やる。やります」

「俺は負けたらきみの命令を絶対に実行する。で、俺に何してほしいの？」

なんでもって言われると結構悩むね。

まあいいや。

前からずっと聞きたかったことを教えてもらおう。

「広瀬くんがなんで全く話さないのかを教えて」

「りょーかい」

彼はそう言っで以前彼が使っていた木刀を手に取り、試合場へと歩を進めた。

木刀でやるの？

しかもあの様子じゃ防具は無しだろうね…

「きみさあ、昔からやってたのって剣道じゃなくて剣術でしょ？きみはきみの流派でやってくれていいからさ」

試合したいとは言ったけどまさかこんな形で願いがかなうとは全くもって思っで無かったよ。

せめて彼が怪我をしないことを祈るばかりだよ…



## 無言？のきみと割れた木刀

彼はいつもそうだった。

いつも無表情でそっけなくてつまらなそうだった。

一部の女の子達にはその表情が真剣な表情をしているように見えるらしいけどわたしにはそうは思えなかった。

どうやらわたしの考えは間違っていたらしい。

目の前にいる彼は今まで見たこともないくらいまっすぐな目でわたしを見据えていた。

その眼差しに殺気が含まれてなければ飛び跳ねて喜んでるところだけど…目の前の彼から向けられている殺気は尋常じゃなかった。

「本気で来い」

彼はそう言うなり素早く踏み込みわたしのど元に突きを放った。

女の子相手に容赦なしですか…

構えた木刀をそのまま横に振りって軌道を逸らしてかわし、後ろに跳んで距離をとった。

それなりに速い突きだけど静ちゃんが負けるほど強いとは思えないんだけど。

この程度の実力なら怪我させずに十分勝てる。

一気に下がった分の距離を詰め、面を狙って木刀を振り下ろした。彼は間一髪で受け止めた。

そりやそうだスピードを加減したんだから。

面を止められた状態からさらに間合いを詰め、柄の先で顎を打った。そしてバランスを崩したところで木刀を放り、服の襟と袖を掴んで背負い投げた。

彼は呆気にとられていたけどこっちの流派でいって言ったのは彼なんだし問題ないよね。

「まさか背負いがくるとは…しかもこんなに短い試合時間で負けるなんて」

「この程度でよく静ちゃんに良く勝てたね」

「ド直球だね」

だって信じられないし。

静ちゃんなら問題なく勝てると思うんだけど…

「きみの実力を自覚なしに引き出したからだよ。その証拠にきみ、かなり手加減してただろうけど…この木刀見てみ」

彼がわたしに放り投げた木刀は見事にヒビが走っていた。

確かに手加減してちやこうはならないよね…

「ん？でも自覚なしってどゆこと？」

「俺がほとんど話さない理由はそれに関係することなんだよね」

いやゝ意味が全くわからない。

あまり頭のよろしくないわたしにもわかるように説明してください。

「まあ説明するよりも実際に見た方が早いと思うよ。打ち合いの前に言ったよね？負けたら君の命令を絶対に実行するって。それを違えようとする…」

彼はそう言うとなたしが立っている所から十数メートルほど離れたところで立ち止まり、突然何もなかったところへ向かって体当たりを繰り返した。

ただ何もない空間に向かって体当たりをするだけだったらわたしは迷わず帰っていたと思う。

誰でもそうしたと思う。

普通なら完全に頭のおかしな人にしか見えないと思う。

でも彼の場合普通じゃなかった。

確かに何もない空間に突っ込んだはずなのに何かに弾かれてわたしのところまですっ飛んできた。

「こんな感じで実行せざるを得なくなる」

転がったまま「なはは」なんていいながら頭を照れくさそうに掻いていた。

突然何の前触れもなくファンタジーの世界に引っ張り込まれたお陰で開いた口が塞がらず、ただただ彼の照れ笑いを眺めるしかなかった。

た。

わたしはどうしたらいいんだろう？

とりあえず笑っておこう。

今は頭が真っ白でそれ以外に何も思いつかない。

ハハハ：ハハ：ハア：

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3287c/>

---

無言のきみと毒舌の君

2010年10月12日07時29分発行